

## 2019年度国際版画美術館事業報告書【展覧会版】

展覧会名	パリに生きた銅版画家 長谷川潔展 —はるかなる精神の高みへ—			担当者名	担当課長兼学芸係長 滝沢恭司			
会期	2019年3月9日(土)～ 4月7日(日)			開催日数	26日間			
協賛・後援・協力	なし							
巡回館	なし							
展覧会概要	長谷川潔(1891～1980)は1910年代半ばに版画家として創作活動を開始、1918年に日本を去ってフランスへ渡って以来パリを拠点に活動した銅版画家。サロン・ドートンヌやフランス画家・版画家協会に所属して創作活動してパリの画壇で高く評価された。現在は、日本でも版画史上きわめて重要な作家として位置づけられている。本展覧会は、国際版画美術館で収蔵する長谷川の銅版画122点と、長谷川が敬愛していたルドンや、フランスで交流のあった画家らの作品45点を全8章(エピソード含む)で構成した。							
ねらい・対象	展覧会開催のねらいのひとつは、国際版画美術館で収蔵する長谷川潔作品のほぼ全てを展示することで、当館の収蔵品の豊かさをアピールすることであった。また、長谷川の創作活動の背景を探りつつ作品の特徴や内容を浮き上がらせることで作品への理解を深めていただくこと、さらに長谷川作品に認められる豊かな精神性を感じていただくことで、現代社会の思考や行動のあり方への再考を促がすことをねらいとした。							
関連催事	催事名		開催日		タイトル		講師等	参加者数
	展示解説		3月30日		館長によるスペシャルトーク		館長 村田哲朗	80
	展示解説		3月10日、24日		学芸員によるギャラリートーク		当館学芸員 滝沢恭司	90
観覧料	一般	65歳以上	大・高生					
	600 円	300 円	300 円					
観覧者数 (現在)	有料計	無料計	総観覧者数	内、一般	内、65歳以上	内、大・高生	内、小・中生	内、その他
	5,146 人	1,650 人	6,796 人	4,285 人	2065 人	167 人	279 人	0 人
	目標値		3,460 人					
主な収入 (現在)	観覧料収入		図録販売収入		受託販売収入		その他の特定財源	
	2,139 千円		— 千円		157 千円		— 千円	
事業経費	・展覧会ポスター等作成委託料		518 千円					
	・作品展示撤去委託料(2018-19年度債務負担行為事業)		334 千円					
	・ディスプレイ作成委託料(2018-19年度債務負担行為事業)		617 千円				計 1911千円	
	・作品額装委託料(2018-19年度債務負担行為事業)		389 千円					
	・著作権使用料		53 千円					
主な広報・取材等の講評	TokyoMX「アートステージ 画家たちの美の饗宴」(3月9日放映、10日再放映)／NHK日曜美術館アートシーン(3月17日放映)／神奈川新聞「イマナカ 文化」(3月18日掲載)／上毛新聞(3月26日)、南日本新聞(4月5日)、徳島新聞(3月23日)、日本海新聞(3月23日)、高知新聞(3月26日)、大阪日日新聞(3月24日)、新潟日報(3月26日)、河北新報(4月2日)以上、共同通信配信)／『版画芸術』183号・3月 ほか							
アンケート結果	回収数	回収率	市民率	リピーター率	満足度(とても良かったと良かったの率)			
	251 件	3.6 %	27 %	65 %	企画の内容	展示作品	展示の仕方等	
					98.4 %	97.1 %	89.4 %	
	主なご意見		別紙のとおり。					

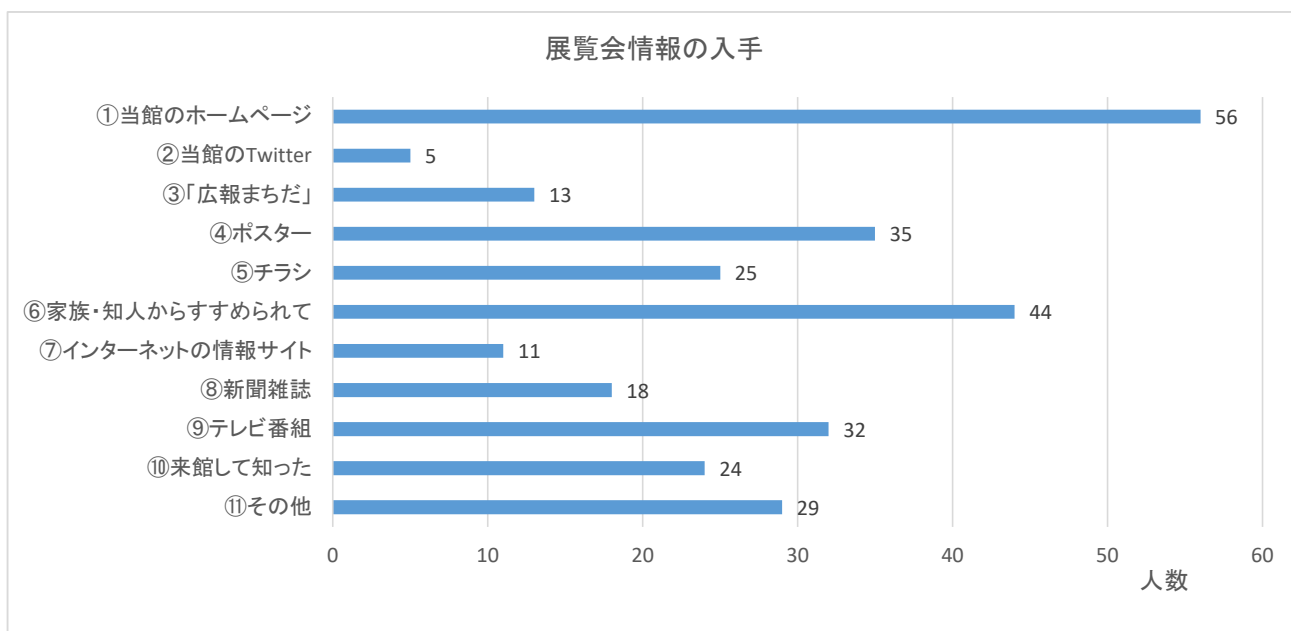
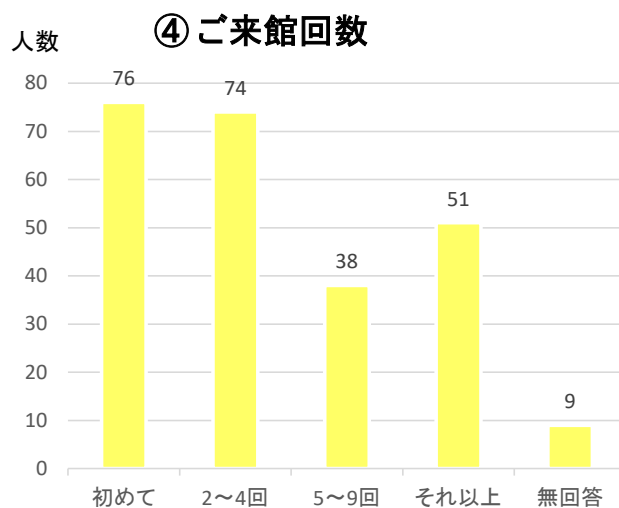
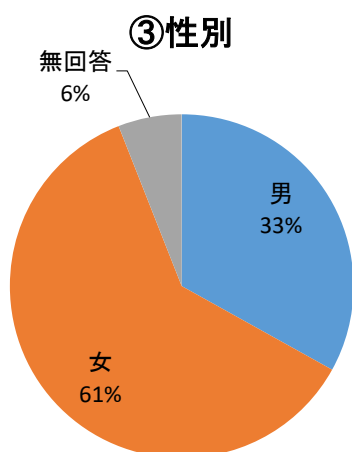
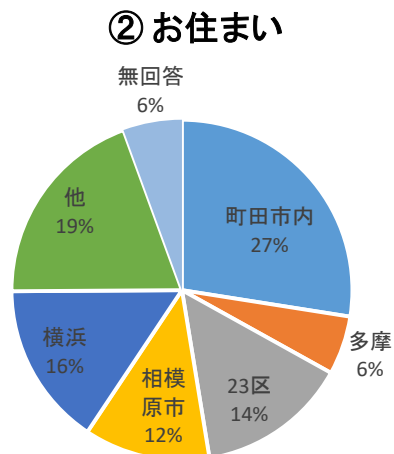
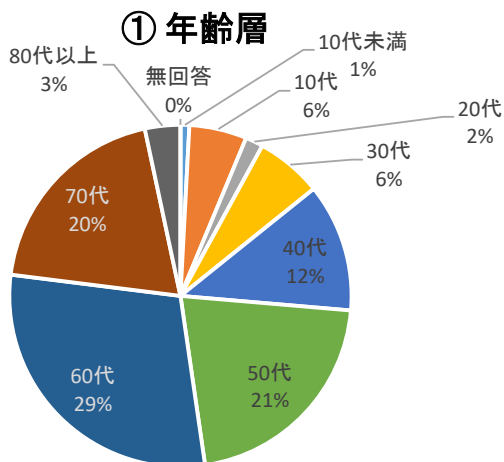
工夫と反省点と改善方法	予備調査	国際版画美術館収蔵の長谷川潔作品全てを再調査し、作品タイトル、サイズ、技法などを再確認した。特に仏訳『竹取物語』については、普通本と特別会員本の違いなどについて細かく調査した。ほか、長谷川潔の画集や関連単行本を調査し、作品理解に努めた。
	作品選択	国際版画美術館収蔵の長谷川潔作品を全て出品することを前提に展覧会を組み立てた(同じ作品が2点ある場合は1点のみ出品)。基本的に制作年代順の展示を構想し、「Ⅰ 日本時代 版画家へ 1913-1918」「Ⅱ 渡仏 表現の模索から確立へ 1919-1941」「Ⅲ 仏訳『竹取物語』1934(1933)」「Ⅳ 白屋に神(神秘)を視る 1941-1950年代末」「Ⅴ はるかなる精神の高みへ―「マニエル・ノワール」の静物画 1950年代末-1969」「エピソード」で構成し、途中第Ⅳ章に「長谷川潔と西欧の画家・版画家」、第Ⅵに「長谷川潔作品への共鳴」を挿入して全体をまとめた。Ⅳ章には人口に膾炙するピカソやマチスなどフランス近代の画家の作品を、Ⅵ章には長谷川と強い結びつきがある日本人の版画家を絞って展示した。
	図録作成	リーフレット(16ページ)を作成し、章解説、図版、リストなどを掲載した。3000部作成して来館者に無料配布したが、最終週には部数が足りなくなり、コピーを配ることで対応した。入館者数を予想することは難しいが、4000部程度作成してもよかったと考える。章解説と作品解説(抄)はです・まずで掲載し、一般来館者にわかりやすかつ鑑賞の手引きとなるようにした。
	ディスプレイ	著作権継承者の承諾を得て、展示全体で合計7箇所写真撮影コーナーを設け、自由に作品を撮影できるようにした。また、仏訳『竹取物語』の展示に関して、額装・壁展示と上から見るケース展示をおこない、ひとつのまとまりある展示コーナーをつかった。出品作品のなかから各章から数点を選び約30点の作品解説を設置して長谷川川作品と制作姿勢の理解につながるように工夫した。英文表示ができなかったことは反省点である。
	広報	ポスター、ちらしのデザインに関して、制作会社から最初に出されたデザインを館内で充分検討し、最終版を決定した。また、通常送付しているプレスリリースに加えて、ツイッターに可能な限り多く投稿し、展覧会の周知を図った。長谷川潔という版画家への興味が高かったことがあると思われるが、その結果、TokyoMXの文化情報番組とNHK日曜美術館で取上げられ、さらに共同通信が取材に訪れ、全国の新聞社に配信してくれた。その結果として、目標を大きく上回る来館者を得ることができた。
	イベント	本展覧会は年度末に開催される短い会期の展覧会で、当初から大きなイベントの開催予定はなく、館長のスペシャルトークと担当学芸員によるギャラリートークを実施した。館長トークでは80名、学芸員トークでは90名(2回分)と、通常よりも多数の参加者があり、長谷川潔作品への関心の高さがうかがえた。
	作品輸送	神奈川県内在住の個人から挿絵本3点を借用し、担当者が手持ちで運搬した。それ以外は全て国際版画美術館収蔵品。
	展示撤去	本展覧会は第1、第2企画展示室を使った展覧会であり、出品数も多く、またのぞきケース展示も多いので、最初から時間を要することが予想された。一方で、展示作業員数は充分とはいえない状況があった。それゆえに、事前に可動壁を設置したり、出品作品を展示壁面の下に置くなどの作業を実施し、概ね予定の時間内におさまるように作業ができた。今後は展示作業員の増員を検討する必要がある。
その他特記事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月15日(金)、NPO法人アルダによる大和市渋谷小学校生徒の対話による美術鑑賞プログラムが実施され、148名が参加。</li> <li>・3月30日実施の館長によるスペシャルトークは、村田哲朗館長在任中の最後のイベントとなり、80名の参加者があり大盛況だった。</li> </ul>	

# 「パリに生きた銅版画家 長谷川潔展」

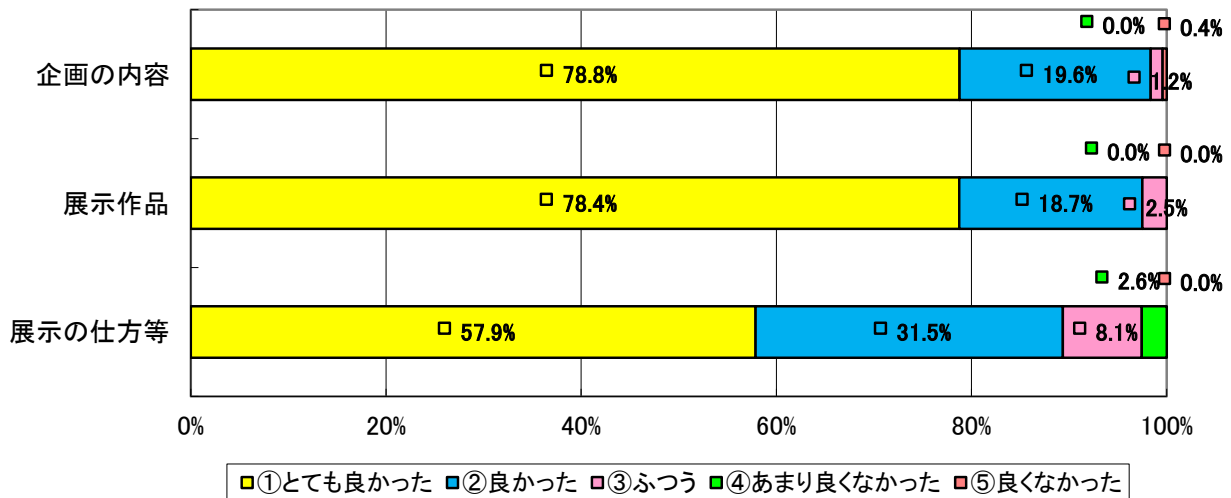
## アンケート集計結果

開催期間：2018年3月9日（土）～4月7日（日）

回答者数： 251 人（総入館者数：6,796人 アンケート回収率：3.6%）



## ⑥ 回答者の満足度



## ⑦ 主なご意見・感想

### □肯定的意見

◆見ごたえがあった。◆何度でも長谷川潔展を開催してほしい(多数)。◆長谷川と交流があった画家・版画家の作品が展示されていたのがラッキーだった。◆写真撮影ができるのはうれしい。あとで同伴者と楽しめる。とてもよいことだと思う。記念になる。◆展示作品が多く、ボリュームがあった。◆静かな環境で、ゆっくりと落ち着いて鑑賞できた。◆版画美術館がこれほど多くの長谷川作品を収蔵していたことに驚いた。◆解説が分りやすくてよかった。◆たいへんすばらしい企画展で、また来館したい。◆無料配布のリーフレットの内容がすばらしかった。◆良い展示会で、プロモーションをもっとすべき。◆東京に用事があった神戸から来たが、足を運んでよかった。◆受付・監視員の感じがよく、気持ちいい美術館。◆はじめて来たが、素敵な美術館だった。◆濃厚な時間を過せ、大満足。◆町田市民になって、自然と芸術に触れる暮らしができるのはありがたいこと。

### □批判的意見

◆図録が無いのが残念。◆写真を撮るのでどいてといわれ、ゆっくり作品が見られない。◆もっと技法の解説が欲しかった。◆撮影の際のシャッター音が耳ざわりで、鑑賞に集中できない。静かに見たい人と、どちらが優先なのか疑問を感じる。◆美術館までのアクセスがわかりにくい。◆トイレを洋式にしてほしい。◆キュレーターの主観が強く、鑑賞の邪魔である。◆作品の制作方法について写真入の解説がほしい。◆売店でクレジットカードが使えるようにしてほしい。

長谷川潔(1891~1980)は1910年代半ばに版画家として創作活動を開始、1918年に日本を去ってフランスへ渡って以来パリを拠点に活動し、歴史にその名を刻んだ銅版画家。本展示会は、国際版画美術館が収蔵する長谷川の銅版画122点と、長谷川が敬愛していたルドンや、フランスで交流のあった画家らの作品45点を全8章(エピローグ含む)で構成した。

展示会開催のねらいのひとつは、国際版画美術館で収蔵する長谷川潔作品のほぼ全てを展示することで、当館の収蔵品の豊かさをアピールすることであった。また、長谷川作品に認められる豊かな精神性を感じていただくことで、現代社会の思考や行動のあり方への再考を促がすことをねらいとした。

展示会広報について、ポスター、ちらしのデザインを館内で充分検討して最終版を決定したことや、通常送付しているプレスリリースに加えてツイッターに可能な限り多く投稿し、展示会の周知を図ったことが功を奏したと考えられる。TokyoMXの文化情報番組とNHK日曜美術館で取上げられ、さらに共同通信が取材に訪れ、全国の新聞社に配信してくれた。その結果として、目標を大きく上回る来館者を得ることができた。

アンケートの結果は他の展示会と類似の数値を示している。気になることとして、展示会情報の入手先トップが「当館のホームページ」であること。今後もHPを積極的に活用した広報が求められよう。また「家族・知人からすすめられて」が次いで多かったのは、展示会への評価と受け取れ、うれしいことである。

展示会への意見としては、ボリュームのある展示で見ごたえがあったとか、静かな環境で鑑賞でき、充実した時間を過ごせた、長谷川潔展をまた開催してほしいといった肯定的意見が多かったが、やはり写真撮影に関して、シャッター音が耳障りで鑑賞に集中できないという批判が数人からあり、検討すべき課題である。